

## 付録1 都のアカデミアのこと 島野達雄

(近畿和算ゼミナール報告集(4) 下浦康邦氏追悼号 2000年9月)

和算ゼミで若手とよばれている私よりなお若い下浦さんが、突然、先に逝ってしまわれた。残念で悲しい、としか言いようがない。下浦さんには、いろいろと教えていただいた。なかでも、「古活字本と整版本の見分け方」について三回もたずね、そのたびに丁寧に答えていただいたことは忘れられない。

二人で議論した問題のひとつに、「慶長年間の京都にアカデミアは存在したか？」がある。下浦さんは、このことについて、わずかなメモを残されただけで、まとまった原稿にはされていない。

この機会に、都のアカデミアに関する資料を私なりに整理しておきたい。

### (1)平山諦『和算の誕生』恒星社厚生閣

和算ゼミで、和算とキリシタンの関係についての議論が始まるきっかけとなった本。「スピノラは慶長9年から16年までの七年間京都にいた。その間に天主堂にアカデミア Academia を設け、数学を教えた」と、「アカデミア」と書いてある。

その典拠として宮崎賢太郎(2)、アンブロージオ・スピノラ(3)、海老沢有道(4)をあげている。

### (2)宮崎賢太郎「カルロ・スピノラの都・長崎よりの三書簡」純心女子短期大学紀要

スピノラの1606年12月3日付け書簡に、「数学は親密な雰囲気の中で主立った殿達の中にうまく入り込むのに非常に役に立ちます。彼等はその種の科学を大変に喜びます。それによって内裏や將軍様も私の噂を聞きつけて私を招かせました。…当地に来る者はもし数学を知っていれば尊敬されるでしょう」とある。

三つの書簡のなかに、「アカデミア」という表現は見当たらない。

### (3)A・スピノラ『カルロ・スピノラ伝』宮崎賢太郎訳(原著1628年)

スピノラがミラノで数学を教えた経験があることや、数学がよくできたのでマカオで新しい教会の設計に参画したことなどが述べられている。「…その後日本の首都であり、また偶像崇拜の首領のいる都に派遣された。当時イエズス会はこの地に公方様と呼ばれる全日本の支配者の許しを得たよく知られたコレジオを持っていた。カルロは七年間ここに滞在し、すべての人に情深い心を持ち、カーザにおいて会計の職を担当していた」とある。都にイエズス会の「コレジオ」があったことは明記されているが、ここでも「アカデミア」という表現は見当たらない。

### (4)海老沢有道『南蛮学等の研究・増補版』創文社

「…彼は1611(慶長十六)年までには京都の天主堂内に数学のアカデミアを設けた」と、カルロ・スピノラが京都に「数学のアカデミア」を設立した、と主張する。著者の論拠は、次のレオン・パジェス(5)の記述にある。

なお著者は、1825年刊行のD・バルトリ『イエズス会史』(邦訳は、松田毅一監訳の『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』同朋社に所収)も引用している。

(5) L・パジェス『日本切支丹宗門史』吉田小五郎訳・岩波文庫（原著1869年）

1611年の項に、「京都では、キリシタン宗は隆盛で、スピノラ師は殆ど全く自由に行動し、科学の翰林院〔アカデミイ〕を創った位であった」とある。

この1611年の項の引用文献には、ジョアン・ロドリゲス・ジラン（(8)の日本教会史を書いたジョアン・ロドリゲスとは別人）の報告などがあげられているが、肝心の「翰林院」の部分の参照文献は、邦訳では明らかになっていない。

(6) 尾原悟「近世科学思想下・解説」岩波書店

都のアカデミアについて、「…イエズス会が計画し会の方針として検討の結果設立された正規の教育機関ではなかった。当時もその様な名称で呼ばれたものではあるまい」とする。海老沢有道(4)に対する反対意見と思われる。

(7) J・セーリス『日本渡海記』村川堅固ほか訳・雄松堂出版（原著1613年）

「この都の都市にポルトガルのイエズス会徒がすこぶる広大な学林をもっていて…」とあり、キリシタン宗の初歩が教えられていた、とする。英人セーリスは1613年に平戸に渡来し、東上して家康や秀忠に会ったほか、鎌倉の大仏も見物している。

セーリスの航海記は、幕末1862年来日したアーネスト・サトウが1900年に出版している（岩波文庫『一外交官の見た明治維新』の巻末「サトウの著述目録」）。

(8) J・ロドリゲス『日本教会史』土井忠生ほか訳・岩波書店（原著1622年頃）

日本の数学は中国の影響を受けた、また、中国の暦法は「われわれのもの」と同じ、といった主張が見られる。「われわれのもの」が何を指すのかは、わからない。

「シナと日本の王たちは、王家の職務として占星術の数学者たちの学校（コレージオ）を持っていて、彼らに貴族の特権を与え、俸禄を給している」とある。訳注は、「日本のばあいは陰陽寮がおかれた」。ここではイエズス会のコレジオという意味ではなく、一般的な「学校」の意味で「コレジオ」という言葉を使っている。

なお、本書の解説に、1627年11月のロドリゲスの書簡が紹介されており、「…これらの地方なり日本なりについて、エウロッパで書かれて世に行なわれている書物には、作り話で満たされた、目新しい、事実とは違った別のことが見られるが、もしも天使が現われて、書物の中の誤謬を取り除くならば、それらは真白な紙となり終ることであろう」とある。

(9) V・F・アルミニヨン『イタリア使節の幕末見聞記』大久保昭男訳・新人物往来社（原著1866年）

「応用幾何学および天文学についての彼らの知識は、明らかにかつての外国との交渉から得られたものである」「カトリックの宣教師がいた時期には、数学の学校があった」と明言している。

都のアカデミアの問題は、私には、何をもって「数学」とよぶか、何を指して「学校」とよぶか、といったことにかかわっているように思える。

十七世紀の(2)(3)(7)の記述からは、「スピノラは数学が得意だった」「慶長年間の京都にスピ

ノラがいた」「京都にイエズス会の『コレジオ』があった」などは、わかる。このコレジオで、どんな教科が教えられたかは、はっきりしない。(8)のロドリゲスの書簡は、当時に書かれたものでも信憑性は疑わしい、と主張している。

二百年を経た十九世紀のヨーロッパでは、(4)のバルトリ『イエズス会史』の出版や、(7)のサトウのように、日本への関心が高まり、(5)(9)の「十七世紀の初め、京都でイエズス会士が日本人に数学を教えた」という説が人口に膾炙したのではなかろうか。